

魚難達鳳池之月、扁鵲何入雞林之雲、ト云秀句カキタリケルタビ、メデノ、シリテツカハサレニケリ、後ニ彼國ノ商人來ケルガ、此句ヲ袖ニ書シテユソキタリケレ、ヒトゴトニカクカキテモタルトナンイヒケル、

〔古事談三行〕東大寺聖人舜乘坊入唐之時、教長手跡ノ朗詠ヲ持、渡唐入育王山、長老以下見之、感嘆無極、其中天神道眞御作、春之暮月、月之三朝之句、殊以褒美不堪、感懷、遂乞取納育王山寶藏云々、

〔藩翰譜十二上〕肥後守藤原清正略○中されば朝鮮の軍一度起りしより、兵連なること前後七箇年

の間、本朝の人々、所々の戰功皆取りくなりしかど、清正一人、大明朝鮮のために名を呼ばれ、或は詩に作りて謠ひ、或は神となして祭らる、弓矢とつての譽、古今に並ぶ者ぞなき、

按ずるに、大明萬曆よりこのかたの書に、清正が名を稱する事擧げて數ふべからず、崑山の王志堅といふ者は、倭王と稱して歌を作る、又朝鮮國慶尙全羅道等の水營の軍官、年毎に日を占ひて、諸營戰艦を集め、海に浮みて海神を祭る事あり、芻にて人像を作り、是を射て海に鎮む、人は秘しぬれども、よく聞けば、是れは清正を呪咀する事にてありけり、その人像は清正にかたどる、彼國の能く射る者といへど、恐れて終に中つる事叶はず、いづれの頃にや、一人射て中てたりしを、雙なき高名といひけるに、忽ち物に狂つて飛び走る、其親戚清正を祭て、いろく罪を謝しければ、其後人心地にはなりぬ、此後人いよく恐れて中たらん事を恐る、本朝寛文の中頃に、例の祭として水營の戰艦共海に泛みしに、海上風忽に吹き落て、波わぎ、艦多く摧け破れぬ、これ清正の祟りなりとて、大に恐れしといふ事を對馬の國人に竊かに承りぬ、

〔徂徠集八〕水足氏父子詩卷序

余幼時聞之太孺人云、肥有高麗門、蓋當豐王之征三韓、肥之先侯有加藤氏正清者、爲冠軍、驍勇功最

著、高麗人至今猶以怖兒啼曰、鬼將軍來也、兒廼泣而不啼、其比諸羅刹夜叉、噉人類、威武所攝、伏可知